

## 『無の神学』を読む（総括）

## 『無の神学』小池福音の特徴とその歴史的意義

2004年7月18日（東京 新宿）

奥田 昌道

『無者キリスト』の総序 絶対次元が相対次元に切り込んできた現実 無的実存 受肉のキリストとキリストの受肉 無条件絶対 新宗教改革 宇宙的なキリスト 宗教と文化は樹木の如し キリスト直結 健全な福音

## ●『無者キリスト』の総序

私はやはり小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』（1975年刊、2001年復刊）と第三巻『無の神学』（1982年刊）の、もう一度、さわりの部分を皆さんと味わいたいわけです。『無者キリスト』の総序というところを振り返ってみます（1頁）。先生の本はすべて、前書きとか総序とか、そういう前の部分が大事です。

「キリストはどういう範疇にも属し得ない人である。また一切のイデオロギーを立ち超えた人である。だから彼のふところの中に入って、そこから告白せしめられるのが、私にとっては最も本質的なことである。そんな現実、そんな念願で、私はこの一書を書いた。」

キリストは実に無私な人、それゆえにこそ無限にして無量な人であった。一切の限定を彼の実存は笑うであろう。そういうキリストであるから、彼を無的実存者、要約して「無者キリスト」と呼ばしていただくのである。……（中略）……

四福音書の伝えるところは、過去のイエスの啓示的事実であり、それはまた現在の我々に主体的に関わる現実であり、未来をひきよせる預言的終末的現実である。福音書はそれゆえ、絶対次元が相対次元に、永遠が時間に、無限が有限にきりこんできた驚くべき現実で、この現実を体感しつつ身読する者には、つねに新しい神劇（オラトリオ）である。神学的に言うならば、イエスという神の人、即ち文字通り神霊の止まっていた霊止（ひと）の出現により、その啓示的実存により、霊的言動により、そこに新しい審判と救済の徴があらわれたのである。

それは、人間の自主自律の事態には躓きのあらしであり、人間の極限状況には驚きの恵みであった。しかもこの福音は歴史の終末に至るまで、いかなる時代にも、そしてこの危機的な二十世紀の今日にこそ、最も深く関わるおとずれである。

キリストの本願は、我々の意志にコペルニクスの転回をもたらし、理知の中心に靈知を与え、情感の奥に靈感を湧きたたせ、身魂に大生命を与えないではやまないもの



である。》

ここに、見事に小池福音の特徴というか、掴まえ方が結晶していると思います。この四福音書の伝えるところは、過去のイエスの——時間的に過去ですね、過去のイエス——まぎれもない、地上に受肉してくださったあのナザレのイエスという方です。小池先生は、イエスのことを「キリスト・イエス」と呼ばれます。「イエス・キリスト」とはあまり仰らない。キリストなるお方がイエスというあの肉の姿をとって現れておられるという。そういう人間イエスを表すときは、ただのイエスではなくて、やはりそこに、キリスト・イエスというように、キリストという名をかぶせないでいられないお気持ちがよくわかります。

そのイエスはまぎれもない、歴史的には過去の方であり、そして、地上に現れた受肉のイエスというお方なんです。ところが、そのキリスト・イエスが歩いておられるその姿、存在しておられるその事、存在も行為も言葉も、それがすべて啓示的事実である。それ自体にしがみついたってしようがない。啓示ということは、それを通して何かもつと奥なるもの、本質的なもの、根源なるもの、それを指し示しているという、そういう存在なんです。

だから、ただイエス・キリストといって、肉体のイエスにしがみついたって、どうしようもない。マリアは、

「ラボニ（師よ）！」

と言つてしがみつこうとしたけれども、

「触るにはおよばない」

というか、「触つたつてどうにもならんよ」ということ。本当にその方を通して現されている事態と私たちが一如にならなければ、それは

「見ても見ず、聞けども聞かず」

というすがたになってしまう。こういう過去のイエス、その御方自体が実に啓示の事実である。啓示的事実であると、そういう捉え方をしておられる。

それから、現在の我々。イエス對我々ですね、過去対現在です。現在の我々に主体的に関わる現実。この啓示の事実だからこそ、消えないわけです。あの木の十字架も、イエスの御身体も、言葉も全部、自然的存在としては過去に消え去っていきます。しかしながら、啓示の事実というのは変わらないで、じつと立っているんです。昨日も今日もその次の日も、この啓示の事実は進み行く。

ちょうど、モーセが民を率いて行ったときに、昼は煙の柱、夜は火の柱となって民と一緒に歩いて行ったという。時には、岩を叩けば水が湧き出たという、それは霊なる岩なるキリストと一緒に歩いて行かれたというふうなコリント書簡で言われています。そのように、過去のイエスが実は啓示的な事実となつて、今もありありとそういうイエス・キリストが我々と一緒に歩いてくださる。だから、現在の我々に主体的に関わってくる。「主体的」ということは、身を投げ入れてそれと一つになれるということなんです。傍観して、「ああ、



そうか。そういうことか」と言って距離を置いていたような傍観的態度では全然、我々と関わりがない。その中に躍り込まないといけないわけです。だからよく、

「ドラマだから、その中に身を投じる。自分がドラマの主人公になれ」

という。映画でもドラマでも、みんな本当に感激して涙を流す。なぜ、涙を流すか。そこで一つになって、気持ちの上で一つになるからです。主人公の苦しみをわが苦しみとし、悲しみをわが悲しみとして、そこで涙を流すというふうになる。知らず知らずそうなるというわけです。もう気が付いたら、涙でボロボロだったと。そういうように、主体的に関わってくる。しかも、現実である。本当に我々に今語りかけてくるというような現実である。それから、

「未来を引き寄せる預言的終末的現実」

という。未来がありますから、遠くの未来を現在に引き寄せる。現在化する。現在に引き寄せる。将来という意味では「予言」、先を見通しているから予言でありますけれども、この「預言」は単に占いの予言ではなくて、神の言葉を預かっていてという。神の言葉を預かって、そしてキリストの存在が語られている。

四福音書がそういう未来を引き寄せて、その未来の救いの現実、完成される現実、それほどどこまでも終末的です。終りがあるんですから、終りが迫ってくるという、その終りの迫り。これは神さまの側から言う、審判です。審判があります。我々はもう審判は免れられています。けれども、キリストを全く問題にしてない人は、自ら全存在をもつてその審判に耐えなければならぬわけですね。

「あなたは神の前はどう歩んだのか。あなたは本当に隣人を愛して歩んだか。あなた

たの実存はどうだったか。神の前に面おもてを上げることができるか」

と。その根源的な人間存在の罪というものに対して、キリスト抜きならば、自分たちはそれに応えなければならぬわけです。誰がそれに耐えられようかという。それをキリストは全部引き受けてくださったから、我々にとっては、審判は救いなんです。贖われる時は、本当の完成される喜びの時なんです。

「審判の奥に必ず救いがある」

と、小池先生はいつも仰いました。旧約以来、審さばきつつ救さばっておられる。審判に服することまぬがが救いとなる。旧約聖書の世界は実に恐ろしい世界です。けれども、それもそういうその審判を通して救おうとしておられる。ついにはみんな救われる。我々の方は、ありがたいことに、キリスト・イエスが全部それを引き受けてくださったから、その終末というのは救いとなって、完成となって、我々に臨んでくるわけです。

そういった、もうこれだけのことにも、先生の福音把握はあくの凄さというのが入っていると  
思います。

《四福音書の伝えるところは、過去のイエスの啓示的事実であり、それはまた現在の我々



に主体的に関わる現実であり、未来をひきよせる預言的終末的現実である。』  
という。

### ●絶対次元が相対次元に切り込んできた現実

こういうことは、別の角度から言いますと、絶対次元が——我々のは相対次元です——相対次元に切り込んで来ているんだと。その切り込み方が、旧約時代には神さまから直接切り込んできますから、審きだつて何だつて非常に激しいわけです。ところが、我々にとつては、イエスというお方を通して切り込んで来ているから、それは恵みになるわけです。それにすぎる者には恵みになります。それに逆らう者には躓きになる。

ですから、それは人間の自主自律には、

「自分が主人公だ、俺の自由は誰にも渡さない」

と言つて抵抗する者にとつては、躓きのあらしである。ところが、極限状況の人間には、人間の極限状況には驚きの恵みである。片一方には躓き、片一方には恵み。これは「言い逆らいの徴」というところでいつも言つておられますね。躓きの石、妨げの岩。しかし、それに縋る者には救いであるという。だから、

《福音書はそれ故、絶対次元が相対次元に、永遠か時間に、

我々の方からいうと、時間というもので捉えられているこの流れは、神さまの目から見ると変わらない、質的に変わらない、時間の長短を超越して、それがずっと切り込んでくるということ。

無限が有限にきりこんできた驚くべき現実で、この現実を体感しつつ身読する者には、

つねに新しい神劇（オラトリオ）である。神学的に言うならば、イエスという神の人、

即ち文字通り神霊の止まっている霊止（<sup>ひと</sup>）の出現により、その啓示的実存により、霊的言動により、そこに新しい審判と救済の徴があらわれたのである。》

これだけでも本当に凄い完璧な叙述だと思えます。ここに（3頁）、

《日本のキリスト教界よ！ キリスト直結の使徒的信仰の次元に、原始の福音に立ち帰り、第二の宗教改革をエクレシアの各自が体現されんことを！》

とある。「キリスト直結の使徒的信仰の次元、原始の福音」、これは2月8日の先生の生誕百年の記念講筵で、私は先生のこの「使徒的信仰に帰れ」というその叫び、「原始福音」ということと「使徒的信仰」というのがどういう繋がりがあるのかというのをずっと辿りました。結局、両者は一つだ、同じことを言っておられるんだということになったわけですが。ここにも非常に先生の特徴が表れています。即ち、今日も讃美歌で歌いました。

「いずれの教派もそれぞれ意味あり」

と。プロテスタント、カトリック、その他もろもろ、形はどうでもいい。各人がキリストに直結して、そこで



「二、三人、わが名によりて集うところ、そこに聖霊がご臨在してくださる」

という、そこでひとりでの一つの環ができる。小人数の集まりが生まれるはずだ。兄弟姉妹が生まれるはずだと。そこに本当に聖霊が宿っておられるなら、それは立派なエクレシヤだ。その立派なエクレシヤが無数に地上にある。それが「キリストの幕屋」という。その「二、三人わが名によって集うところ」を「聖霊の幕屋」と呼んでおられます。聖霊が臨在し給う。その聖霊の幕屋があちこち方々にあつて、それが「キリストの幕屋」という大きな有機体を形作っている。それがやがて「神の幕屋」になる、という捉え方です。だから、基本はやはり「個」なんです。「初めに教会ありき」ではない。

「初めにキリストありき、初めに神ありき」

です。キリストは神と共にいらつしゃつたんですから、そのキリストが地上に現れてきて、私たちを召し集めてくださった。各人、キリストに何らかの方法で近寄り、この霊なるキリストに触れて、我々は死から生命にひっくり返った。そこで聖名を呼ぶ者たちがおのずとそこで形成された。どうして、そういうように形成されたのかは誰もわからない。我々は地上でも、家族がどうしてできたのか、なぜ自分は五人兄弟なのか、自分は三人兄弟なのか、なぜこういうのかということとはわからない。生まれてきてから気がついたのですから、わからないのと同じように、キリストが我々を捕まえて生みだしてくださった、

「今日、われ汝を生めり」

「はい、ありがとうございます」

というふうにして生まれた我々がそれぞれ「キリスト直結」という。だから、

「いずれの教派も それぞれ意味あり」

ただ胸に在りや 砕けの十字架」（召団讃歌A25「いずれの教派も」第1節）

という。ただ、胸に手を当てて聞いてごらん、十字架と聖霊がすっかり立っているかと。だから、この「十字架と聖霊」というのが非常に小池先生の福音の特色になります。特色中の特色と言ってもいいでしょうね。「十字架聖霊一如」ということがこの序のところにもう表れてきたというわけです。

### ●無的実存

「無的実存」とか、「実存」ということをちょっと触れておられるのが、17頁の「まえがき」というところです。この『無者キリスト』は、第一部が「キリストの実存十転」、第二部が「人間の福音的実存七相」、そして第三部が「無的実存」となっていますから、それぞれ「実存」という言葉が共通に用いられているので、その「実存」というのは何かということを読みあかしておられます。

《実存 (existencia) とは、潜在的なものが顕在的に現われることを意味することは周知の如くで、



実存とは潜在的な、いわば隠れているものが顕あらわになって現れてくる、そういうことを意味する。「イクス」というのは「外に出ていく」ということなんですよ。隠れたるものが顕あらわになって現れてくる。ただ静止的にものがじつとしていてというのではなくて、必ずその本質的なものが外へ現れてくる。「隠れたるものに現れないものはない」とキリストが言われたように。

観念的に思われている事態ではなく、存在そのものが他者との深い関わりをもっているのだから

これを先生は、「ヤハウエー」という神さまの名を、モーセが

「あなたは何というお名前ですか」

と聞いたたら、

「我は有りて在るものなり」

と答えたというふうに普通言われています。それを

「我は在らしめて在るもの」

という。神さまが「在る」という存在そのものは常に他者を、我々を在らしめる、生かす。じつと存在しているのではなくて、それは絶えず働きかけて他者を生かす。そういう存在だと。じつとしていてではなくて、じつとしていてもそこから何かが流れてきて、他者を生かしてしまうという他者との関わりの中で在る存在のことを「実存」ということのようにです。

存在そのものが他者との深い関わりをもっているのだから、実存は行為的存在といっても可よい。

行為的存在。行為しつつある存在。動的な作用をしていくような、そういう存在。

信仰というものも存在的行為といつて可い。

じつとしていてること自体が行為となつて現れてしまうという何か非常に動的なもの。

実存とはそのような活いける現実存在である。》

という。赤ちゃんとか子どもはじつとしてませんね。じつとしておれと言っても、たえずチョコチョコ動き回って何かしています。そういうふうに、我々の存在というのは、寝ていようが、黙って坐っておろうが、あるいは歩いておろうが、何してもすべて他者との関わりの中にあるという、そういう働きかける存在だという。これが悪の作用を働きかける存在だったら、もうたまりません。自分というものが絶えず悪をまき散らして、絶えず災いをもたらす存在であれば、もうこれはやりきれません。けれども、キリストに在る実存というのは、絶えず善をなさずにはおられない。絶えず善を為すという存在になったら、うれしいですよ。本当にそうなるんですかと。

「マイナスは全部、私が引き受けた。お前は私に信頼して、私の中に躍り込んできたら、もう何も心配しなくていい。お前を通して、結局は最善がなるんだよ」



と。ローマ書8章28節に、

「<sup>すべ</sup>凡てのこと相働きて善となるを我らは知る」

という。自分に善となるだけでなくて、他の方々にとつてもあなたのやっていることは善となるんだよと。こういう本当の自信を与えていただいたら、この人生はもう本当に生き甲斐のある人生になるんです。ところが、

「本当かいな。私はやはり人に迷惑ばかりかけている。しゃべりすぎて、でしゃばりすぎて」

とか、口は災いのもとですから。自分を顧みれば、段々段々、消え入りそうになりますけれども、それを

「心配するな。私が責任をもつ」

と、どーんと背中を押してくださるのはキリストです。

「その代わり、私（キリスト）と本当に一つになりなさいよ」

「どこで一つになるんですか」

「祈りだよ」

「どこで祈るんですか」

「十字架を瞑想して、十字架の中で祈りなさい。十字架の主さまが目の前に立っておられるじゃないか。お前が私を呼んだのではないよ。私がお前を捕まえて、それでお前は気がついたんだよ」

と言われる。

「汝われを選びしにあらず、われ汝を選びたり」

という。それが「コペルニクスの転回」と書いてありました。自己中心で見ていたのが、実はそうではなかった。向こうから絶対次元が、永遠が、無限が、相対次元の時間の中の有限なる我々に切り込んできた。しかも肉なる、罪と死に閉ざされた、こういう闇の——実体は闇だという——そういうところに、絶対次元、永遠、無限、生命、光、愛、それが切り込んできて、闇を光に変えてしまう。そういう神さまの大いなる御業の歴史であるというふうに捉えておられる。

とかく、プロテスタントの信仰というのは自分を見ます。「自分は罪深い」とか、「自分は信仰があります」とか、「自分にはありません」とか。常に、「自分、自分、自分」というのが付きまとう。小池先生はそうじゃない。絶対次元があまりにも凄いので、こっちはどうだつていいという。それが徹底している。

「本当に十字架であなはぶつ飛ばされている。あなたは無者にされているんですよ」

と。さきほどのマタイ伝5章3節の、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」



これをすべて今までの人は、キリストが我々に教訓を垂れ給うた「山上の垂訓」としてきた。

「お前は、霊貧しくなれよ。そして、天国はお前のものになるかもしれないから。」

「さあ、霊貧しくなれよ」

と、そういう命令として。

「心清くなれよ、そうしたら、神さまが見えるかもしれないよ」

と。そういうキリストは教えを垂れ給うたと受けとった。ところが、小池先生は違った。

「あれはキリストご自身の告白である」

と言われた。キリストはどんな御方か。神さまの前に全く霊が貧しい。自分を投げ出している。

「私は何ものでもありません。あなたの御前には空っぽです」

と。神さまの前に本当に空っぽ。そうすると、神さまという無限無量がキリストの中に宿った。だから、

「本当に幸いだよ。霊が貧しくなつてごらん。私は本当に霊が貧しくなつた。そして、

たら、天国が宿つた。さあ、この天国をあなたにも上げたい」

と。まず、キリストの姿が霊の貧しき姿だった。無者だった。本当に無者だと。それを小池先生は「実存的無者」と言われた。存在的無者ではない。虚無の無者ではない。実存的無者というのは、自分を投げ出している。

「我が意志にあらず」

と言って、徹底的に自己否定して、

「あなたの御意だけを私を通して貫いてください」

という、本当に自分がふつ飛んでいる、そういう生き方を貫かれた。これが「義」なんです。だから、霊の貧しき姿と、神の御意を一切として生き抜いたという義の姿がまた一つになっている。そういうふうにキリストを捉えた。そして、その捉えたキリストの姿が即、今度は私たちの中にも成就するんだという、これがまた小池福音の特徴なんです。

「四位一体」と仰るでしょ。キリストの中に起こっている素晴らしいことは、それで止まっているのではない。それで止まっているのなら、またキリストが天に帰られたら、「さよなら。またいつかお会いしましょう」ではない。キリストというあの凄い事態が今度は、聖霊というお姿になって、我々一人ひとりの中に宿つてくださって、

「今度は、お前とはもう絶対一緒だ」

と。永遠が相対次元に切り込んで、時間の中に切り込んで、相対的な我々を絶対的な質に変えていく。変えていって、

「お前は絶対のものをいただいたよ。お前は永遠者だ。お前は無限無量者だ。生命だよ。愛だよ。義だよ」

と言う。



「ああ、それはあなたのお姿ではありませんか」  
「お前をその通りにしてみせるよ」

という、これがキリストの愛なんですからね。この絶対愛、この前には一切文句を言っ  
はいかん。「はい」と言う。「私なんかとてもそれに相応しくありません」と言うのは傲慢で  
す。キリストさまがあれだけの犠牲を払って、

「お前にそれを上げたい。お前をそういうふうにしたい。お前を天国人にしたい。  
そのために私はあれだけの苦しみを背負ったではないか。それをお前は無駄にす  
る気か。それを受けとらないのか。受けとって欲しいんだよ」  
と。だから、

「それを本当に受けとれば、えらいことになる」

とよく小池先生は仰います、えらいことになる。えらいことになって欲しいんですね。  
キリストの本願がそういう角度で、この我々罪びとを即義人に、死に定められた者を即生  
命の世界に、愛なき者を愛そのものに化する。この転換、これが十字架です。この十字架  
が間に立っているんです。これとそれとを繋いでくれるのが十字架です。

十字架でキリストは死につばなしではない。あの霊体のイエスとなって現れて、そして、  
天に昇って聖霊を遣わす。聖霊は小さきキリスト、キリストの分身ですから。

### ●受肉のキリストとキリストの受肉

そこで、先生の『無者キリスト』第二部の中の「宗教と文化」というところに、「受肉の  
キリストとキリストの受肉」（360頁）という見出しがある。始めの「受肉のキリスト」はわか  
りますね。ヨハネ福音書の始めに出ている、ロゴス・キリスト、神と共に在した霊なるキ  
リスト、永遠の天界におられた霊なるキリストがマリアさんの中に宿って、人と同じよう  
な姿になってくださった。それが「受肉のキリスト」ですね。

今度は、「キリストの受肉」とは何ですか。

『われ生く、されどもはやわれに非ず、キリストわがうちにありて生くるなり』（ガラ  
テヤ2・20）の消息である。これは信仰をもってするキリストの受肉と申して可い。」

と。つまり、今度はキリストさまが我々の中に受肉して化体して、我々の中に宿ってくだ  
さる。霊なるキリストはマリアさんの中に宿った。そして、キリストは十字架の贖いを果  
たして天界に往かれた。今度は、聖霊なるキリストが我々の中に宿って受肉してくださる。  
霊なるキリストが、しかも贖いを終えられた——霊なるキリストはいつも十字架が光って  
いるんですよ、いつも十字架が光っている——その霊なるキリストが我々の中に宿り給う。

「私はキリストの受肉体です」

と、皆さん一人びとりが言えるわけです。これは恵みなんです。

「そのために私は地上にやって来た。そのために私は十字架を負った。そのために



私は天に昇った。そして、父の約束通り、あなたの中に宿る」と。火となつてくだる。そして、新天地のときにキリストと同じ栄光の姿に我々は化せられる。今は、隠されていますけれども。コロサイ書が言ってますように、

「我々は今、隠されてある。キリストの再び現れ給うとき、我々はキリストと同じ姿に化するなり」

とありますように。しかし実は、その種は我々の中に宿っているわけです。ですから、受肉のキリスト、霊なるキリストが我々の中に受肉してくださいとくださるという消息。これも私は小池先生の福音の非常に大きな特色だと思う。

「罪、罪、罪といつまでも言うな」ということをよく仰います。しかも、その罪の捉え方が、

「あの罪、この罪という個々の我々の悪しき思いとか悪しき業とか、そういうった端々のことではない。存在そのものが罪だ」

という。これは厳しいんです。「存在そのものが罪」という。先生はそれを「自我」という言葉で表します。今まで、罪を自我というふうにつまえたキリスト教の人に私はまだお目にかかつていない。どなたかいらつしゃれば、教えて欲しいけれども。

仏教の方では、「業」だとか、自我とか、我執だとか、そういうことを言いますが、キリスト教の方では、「罪、罪、罪」と言つて、その「罪」というのは我々の悪しき思い、心の悪しき姿、悪しき業、悪しき言葉、そういうふうなものを罪と言っている。毎晩、毎晩、寝る前に、

「今日も罪を犯しました。お赦しください。明日もまた罪を犯すかもしれません。あらかじめお赦しを願っておきます。今日も罪を犯しました。すみません。明日はどうなるかわかりません」

なんてね（笑）。ところが、先生はそんなのじゃない。

「自分という存在そのものが罪なんだ」

という。なぜか。神に逆らうから。神に逆らう思いを「肉」と言う。パウロの言う「霊」と「肉」の区別で、「肉」というのは、生まれながらの自我であつて、それは必然的に神に逆らうように神に造られてしまった。そう造つた方がわるいと言えはそれまでなんだけれども。実際そうなんです。それは現実なんです。自我を立てる。それが罪だと。

それでは、キリストはどうか？ あの方是我々と同じ人間でありながら、それが無い。自我を立てない。では、まったく意志のない方かというのと、そうではない。己が意志というものを全部、神さまに預けてしまった、献げてしまった。

アブラハムはやつとの思いで、イサクを献げました。どれだけ厳しい戦いがあつたか。アブラハムが必死の思いでイサクを献げた。そういう姿をキリストご自身は常にいとめたやすくやつておられた。あの最後のゲッセマネだけです、あれだけ苦しまれたのは。キリ



ストはご自身を神さまの前に献げることによって、生き生きと生きておられた。ところが、ゲッセマネではどうですか。自分を献げることによって、神さまから蹴飛ばされて、

「地獄へ落ちろ」

と言うんでしょ。「献げれば生きる」というなら、我々は献げたいですよ。でも、献げられない。自我がじゃまして、それで苦しかったわけでしょ。我々は道がわかっているのに、そこへ行けないという苦しさに悩んだわけでしょ。けれども、キリストはいとも簡単に、

「父よ、あなたの御意のままに」

と言って、すーっと中へ入って行って、

「天国はわがうちにあり」

と、本当に祝福された世界に生きておられた。あげくの果てが、献げた結末は、神さまから捨てられるという断絶がそこに待っている。これは、キリストは苦しまれますよね。

「それは話が違うじゃありませんか。あなたに献げたら、いつも生命にあふれた、愛にあふれた、喜びにあふれた、そういう存在で、その喜びで人々を抱こうとした。ところが、今は、『お前は私によって捨てられよ、それができるか』と。それしかないんですか。」

「それしかない。お前は人を抱きたい。けれども、直接愛では抱けない。お前は罪の贖いをしなければならぬ。そういう意味において、身を捨てなければならぬ」

と。これは誰もできないですよ。そんなことは誰にもできない。けれども、キリストはそれをしてくださった。そういうお方が死につばなしでいるはずがない。義を生き抜き、愛を生き抜いて、そして最後は、我々罪びとの審判を全部ひつかぶって、審かれたもうた。そのお方が地獄に留まっておれるはずがない。その方の生命が現れざるを得ないし、神さまはまたその方を引き上げざるを得ない。それでなければ、神さまの世界はもう全滅ですね。没落というか、もう破壊されます。

だから、キリストのあの復活という事態は必然なんです。しかも、復活だけでとどまらない。昇天して聖霊となって我々の中に宿るといふ受肉、その「キリストの受肉」という事態が我々の中に成就していく。

そういう凄い事態を先生は「キリストの実存十転」というところで表しておられます。また『無者キリスト』を読みなおしてください。ロゴス・キリストが受肉のキリストとなるところから、ずっと書いています。

### ● 無条件絶対

それからもう一つ、この『無者キリスト』の第二部では、人間の相すがたを書いている。まずは、さつき申し上げましたように、キリストと神さまとの関係を第一部で捉えた。それはそのように己を献げきつた方、自分が霊が貧しい姿、そこに天国が宿っていたという姿。そして、



この受肉のイエスという方は絶えず、

「父よ！」

と呼んでおられる。神さまのことを「神よ」なんて呼んでいない。親しく「父よ」と呼んでおられる。それから、自分を「僕」として自覚しておられる。「父よ」と言っても甘えっぱなしではない。

「あなたの御意に私を献げます」

という。「子」であり、同時に「僕」である。そして、信愛関係で結ばれていた。そういう姿がキリストと神さまとの姿でした。

今度は、我々の姿はどうかというと、これは「破れ」なんです。「罪」そのものなんです。から、さっきの自我というのが逆らうから。放っておけば逆らうから、生まれながらの間は死ななければ直らない。これにみんな気付かない。いい加減にしているんですよ。でも、本当に良心の鋭敏な人、偉大なる宗教家という人はみんなそれで苦しんだ。

「ああ、われ悩める人なるかな」

と、みんな苦しんだ。それぞれにそこから脱却の道を求めて、さ迷った。我々は、キリスト・イエスという方がそうやって、この我々の罪そのものをひつかぶってくださいったという、その福音に触れた。そして、もう己を見ないでいいと。死はキリストが引き取って、生命を我々に与え給うという。これが福音なんです。しかも、無条件絶対です。無条件絶対の恵みなんです。これがまた、小池福音の特徴ですね。

「無条件絶対。ただ受けとれ」

という。しかも、絶対次元が切り込んできているんですから、こちらはもう一切問題ない。パウロはどうだったですか。パウロは、無条件絶対はけしからんと思っていた。怒り狂ったんですよ。パウロは律法に、本当に忠実に必死の努力をしていた。キリストの無条件絶対の恵みの世界に、愛の世界に生きる、

「そんなバカなことがあるものか」

ということ、ステパノを叩きつぶした。そしたら、ステパノは石撃ちにあいながら、天が開けてキリストが立っておられるのが見える、輝いている。

「主よ、彼らを赦してやってください。彼らはやっていることがわからないか

らです。私の霊を御手に委ねます」

と、キリストと同じことを言っただけで凱旋して行った。

その条件付きの、人間の立派さ、行いの立派さ、神の御意に沿う努力によって神に受け入れられるというその自己規律。自分が這い上がって神さまの天国を捕まえるという、この這い上がっていく努力のパウロが復活のキリストに打たれてガラッと変わってしまった。

「私は罪びとの首だ」

と言う。そして、無条件絶対へ来しました。そのあまりにも凄いひっくり返り、転換。だか



ら今度は、パウロは裏切り者としてユダヤ教の人から激しく迫害される。それは裏切り者ですよ。「あんなやつは生かしておけない」という。それをキリストは見越して、

「お前は私の名前を運んで行く選びの器だ。しかし、どれほどそのことの故に苦しむことになるか測りしれない。けれども、お前はやってくれる」

と。いやあ、男と男の世界ですよ、キリストとパウロは本当に。そうでしょ。これはもう凄いですよ。だから、パウロがあれだけの伝道をやったわけですね、無条件絶対に。しかも、パウロは一番、聖霊のことを言っているわけです。

「われ主と共に十字架せられたり。最早われ生くるに非ず。御霊のキリストわがうちに在りて生き給うなり」

という。パウロは言ってますよ、

「私は、不思議と徴と能力ある業はみんな聖霊の御業で、それ以外私は何も誇るものはない」

と。もうアテネで失敗してますから、コリントへ行ったときは、

「ただ御霊と能力の証明によった」

と言う。

「私は十字架せられ給いしキリストだけを宣べ伝える。これは異邦人には愚か、ユダヤ人には蹟きである。しかし、私はこの十字架せられ給いしキリストだけを伝える。しかし、神の愚かさは人の賢さよりもさらに素晴らしい。あなた方はみんな無者ではないか、とるに足らないものではないか。その者の中にキリストは入って行って、あなたをひっくり返して、素晴らしい姿にして、

栄光が現れるんだ」

と。そういうふうな無条件絶対です。

この「無条件絶対」と言いますと、パウロ、ルター、内村鑑三、小池辰雄という流れになる。大きな流れから言いますと、まずパウロでしょ。それからルター。ルターはもう必死になって、本当に死ぬほど苦しんだんでしょ。カトリックの優等生として律法の道を歩んで、しかも平安がないということ、模範的修道僧といわれたルターが独房の中でぶっ倒れていた。そして、あのパウロの福音によって救われたわけです。

「神の義は福音のうちに顕れ、信仰より出でて、信仰に到らしめる」

と。ああいったローマ書1章、3章を通して、ルターは、

「人が生くるのは行為おこないによってではない、本当にこの神の子イエス・キリストを信ずる信仰おこしによってのみ」

ということをルターは言ったわけです。そこで言う「信仰のみ」というのは、キリストの中に自分をぶち込んで、己を問題にしないという姿です。カトリックの方は非常に行為を重んじますから、そこで論戦が起こって、



「私は聖書の上に立つ。信仰のみだ」

と、そういう系統を内村鑑三は引き継いだわけです。内村鑑三も本当に苦しみぬいたんです。「自分はいかにして神の前に義たりうるか」

ということ。いろんなことをやってみた。けれども、全然、平安が来ない。アメリカへ渡って、本当にいろんなことをやった。アマスト大学のシーリー総長から、

「お前は どうしてキリストを見ないのか。どうして自分ばかり見ているのか」

と、そういう言葉が転機になって、彼はやはり自分全部をキリストに明け渡すということを経験した。聖霊体験をそこまでされながら、そのあと、聖霊の現象に躓いて、それに対して隔てをつくられた。それでストップしてしまった。それを突き抜けたのが小池辰雄なんです。

### ●新宗教改革

「新宗教改革」(『無の神学』171頁)というところに出てますね。内村鑑三と無教会、それを突き破って本当の意味の新宗教改革をしようという。これが『無の神学』の中のやはり我々との関わりにおいては白眉はくびだと思えます。そこをちよつと見ていただきましょう。202頁からの「万法帰一」というところ。これは小池福音の大いなる特色だと思えます。これはもう宇宙的で、仏教であろうが何であろうが全部、それを肯定してしまふ。排斥しない。排除しない。「本ものだよ」という呼びかけ。これが小池福音の特色の一つであり、歴史的意義だと思います。今までは、どちらかというところ、

「キリスト教、キリスト教。キリスト教にあらずんば」

というふうなキリスト教に忠実なあまり、他宗を排斥し、受けつけない。そういった非常に排他的な、キリスト教の絶対性を主張するものから解き放たれる。

キリストは素晴らしい。その素晴らしいキリストは「無者」なんです。何もありませんから。その背後にいる神さまは捉とらえどころがない。そうでしょ。神さまは、「アラー」と呼ぼうと、「ヤーヴェー」と呼ぼうと、何と呼ぼうと、一向に差し支えない。「如来」と呼んでも何でも結構だと。

そういう絶対無限の、無限無量なる神さま、捉えどころのない神さまがあんなザレのイエスという方に宿った。そのイエスという方とその無限無量の神さまが一つになってしまった。そこでこのイエスという方を通して無限無量が顕れた。それを受けた人間が何ものかであったら、どうするんですか。キリストが無者ならば、我々も無者にしていただこうではないか。

無者は絶対に他者を排斥しない。宇宙の霊に貫かれているだけだ。一切を包摂する。もう、他宗排斥はやめましょう。

「本ものならば、すべてよし」



と。そういう大肯定の世界なんです。大肯定の世界がなぜ出てきたかというところ、徹底的否定があったからです。徹底的否定があったから、今度は徹底的大肯定がそこで生まれてきたんですね。そういう激しさ。それがこの「新宗教改革」の「万法帰一」というところに表れています。

拾い読みしますと、「宗教改革の精神」の見出しのところ(203頁)。  
 《ところで宗教改革の精神は何かといえば、キリストの福音の本然の相に帰ることであつた。……

旧教とか新教とかいっても、帰するところはキリストの使徒たちの次元でなければならぬ。聖霊の現実に帰入するなら、旧教であろうと、新教であろうと問うところではない。信条や礼拝様式の相対的相異や特殊性は夫々それでいい。問題は福音の根源現実がそこにあるかである。それで私は「使徒の次元に帰入せん！」と叫んでいるのである。そしてその焦点はキリストの十字架の贖罪を土台とした聖霊の愛である。これは最も深い力をもっている。》

十字架と聖霊でしょ。十字架は神の義の貫きですね。それをキリストが見事に受けとめて、自分を砕いてくださった。それが土台となつて、聖霊という生命の霊が、愛の霊が我々の中に宿つた。

「その焦点はキリストの十字架の贖罪を土台とした聖霊の愛である。これは最も深い力をもっている」

と。「福音の心臓は愛である」と言う(204頁)。

《キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、汝を罪と死との法より解放したるなり」と。正に活現する靈法である。……

この靈法は旧くしてつねに新しくある。靈法の質は愛に他ならない。……福音の心臓は愛である。

然らば仏教に於てはどうであろうか。深遠な哲理をもつ仏教は仏法(ブツダ・ダルマ)と称せられる方が当っている。即ち覚者(ブツダ)の法である。法の帰するところは慈悲大悲の他何ものでもないであろう。南無阿弥陀仏と謂い、南無妙法蓮華経と謂うも、覚者に南無すること、妙法に南無すること、帰依、帰入することである。

つまり、それと一つになるといふこと。ブツダと一つになる。その法と一つになる。それ以外にない。

宗教的世界の法は、物理的世界の自然法や、道徳的世界の道徳法より次元の高い、むしろ絶対次元と申したい次元の法である。……靈法はものすごい靈生の活現する無法の法とでも申したい靈的な力ある自由の法である。仏教でいうじねんぽうに自然法爾もこれに通う。それは万物を活現せしめる愛の、慈悲の法である。》

「愛の法で一切を包む」といふことを言われました。それから次の206頁「霊の生命は愛」と



いう見出しのところ。

《パウロは三位一体の神、キリスト、聖霊の中に内住し、ものすごい霊的な力を体受して、それによってあの大伝道をやった。聖霊の自由は最も強く愛の力として活動する。それを全的に活現していたのはもちろんキリストである。……》

宗教の真の現実とは、聖典の中から同次元的に告白されねばならない。註解、解釈ではない。それと同質の次元に自分が入り込んで、そこから告白する。そういうことではなければならない。

霊法を体現する現実であらねばならない。法身的な質となつてゆくならば、そのとき始めて方法は帰一する消息がつかめてくる。そこはもはや概念や観念の世界ではない。天台、真言、浄土、真宗、時宗、臨濟、曹洞、日蓮宗、何宗であろうとそれを帰一してつかめる境地である。ユダヤ教、キリスト教、回教、何であろうとそれを深くつかみ得る絶対境である。万法が帰一する消息は、法をして法たらしめている霊根源、これと一つになることによつて方法を解説できる。

によつてつかめる。その霊の生命は愛の一語であらわすより仕方がない。そのほかには無とか空とかいうより仕方がなからう。無量寿、無量光、無量愛こそは方法をして帰一たらしむる霊的内実である。

そして最も普遍的なことは万人にあてはまる。例えば空気は万人が無条件に、ただで呼吸している。無価値の空気が肉体には無限価値の絶対必要物である。霊気は魂の世界において同様に必要不可欠なものである。それゆえ万人は宗教人であると私は謂う。

絶対界との結びつきなくして、本当に生きることができない。それに目覚めてほしい。魂は飢えている。魂は叫んでいるはずだと。

霊気を呼吸することが祈りなのである。

この「霊気」というのは本当の根源霊の霊気ですね。キリストの御霊、そういう霊を呼吸することが祈りなのであると。

霊界に投身することを私は祈入と言っている。いかなる文化文明のいとなみでも、いとなむ主体たる人間が、祈入によつて霊的原始力を受けると、いとなみが本ものとなつてくる。

そのようなわけで特に各国の第一線の政治家たちが、まず神霊を受霊して靈止に立ち帰れば、お互いにたましいの握手ができるようになる。それは超イデオロギーの現実である。そこに始めて本当の平和がやってくる。まず魂が絶対界と結びつき、平安を得て、万法帰一を体感し、愛こそは万法帰一の実質であることに豁然として目醒めれば武器はおのずから棄てられ、いつわりなき平和がやってくる。この世紀末的危機の現状に鑑み、このことを祈願してやまない。《》



これは本当に凄い文章ですよ。そして、結びのところがその次の「終末論的展望」(208頁)に出ています。

《私は「新宗教改革」が何であるかを婉曲に語ったわけである。「新」とはネオオスの新ではなく、カイノス的新のことである。旧びずつねに新たなる新である。それは第一条件として、十字架の贖罪を全身で信受し、全身的帰入の態勢で祈り入って、聖霊という無比の賜物を受けとる、という十字架・聖霊の不可分の事態を根底とすればおのれは無となる。この無即無限無量、即ち、無は十字架が授け給った自我の解放、無限無量は十字架のその場に来臨し給う聖霊である。……「二、三人わが名に在って集まるところに我在り」とのキリストの霊的臨在にあずかること、その集まりは、従来のどの宗派、形態にも関わらない。「新」の意味は、そういう非本質的なことは問題としないことである。……

宗派争いかさういったことは一切問題ではないと。

信条、礼拝様式、教会堂の如何、宗教団体の組織如何、そういうことは第一義的問題ではない。人間は運命、環境によって限定されている相対的、特殊的存在だから、どれでも可い、むしろ百花繚乱的に大いにさまざまな宗派があつて可い。他の宗教に対しても、それを認識し、理解し、尊重するトランス(寛容)がなければならぬ。否、むしろ、本当に神・キリストの聖霊が内住してくると、そういう鴻大な宇宙的な気魄となってくるから、一切を然るべく認識し、尊重し、そのいろいろな本質を把握し、他宗、諸相をつかみ、限界あらばそれをキリストの光で認識し、助成もするし、包摂してよいよ「キリストに在る」信仰のすこぶを自覚することができる。

宇宙的キリストに聖霊に在って把握されると、キリストの鴻大なる氣宇がわが胸の中に澎湃として波うち、一切を超包する。》

### ● 宇宙的なキリスト

この「宇宙的なキリスト」ということは、この『無の神学』の総序(一頁)というところをご覧ください。そこに出てくる。

《東洋人であり、日本人である私は、「無」という言が、無私、徹底、無常、空無、靈妙、絶対、深遠、鴻大、無量、無限等の概念と深い連関をもった内容を表現し得る言であると思うので、おのずから撰ばされたのである。》

何よりもこの無が、宇宙的な靈的人格たるキリストを表すに最もふさわしい言と思つたからである。それゆえキリストを中心とした神学であり、聖書を主題とした神学であるが、……

聖書は神の啓示史を中心とした書であるが、神が靈光を闇の世に投じて、これを靈光の世界に救済せんとする深刻な悲劇の相を有ったドラマであるので、私の神学の性



格も霊的な劇的なものとならざるを得ない。……内実の焦点からは、十字架・聖霊の神学である。

聖書の著者は神であり、主人公はキリストである。旧約に於てキリストはロゴスとして隠れた実存主であり、新約に於てキリストはサルクスと成ったイエス、顕わな実存主である。この宇宙的歴史的霊的人格たるキリストはまことに言語に絶する無者である。……

「キリストは神のドラマの主なるぞ

キリストは宇宙を抱くみ霊かな」

と。この辺が凄いですね。

「聖書の著者は神であり、主人公はキリストである」

と。そうでしょ。始めに神と共に在した方ですからね、ヨハネ伝にあるとおり。それが時満ちて、受肉してくださいました。では、受肉してくださいださる前の旧約時代は何をしてもらったかという、隠れて歴史を導いておられた。イスラエルの民を導いておられたんです、さつきコリント書で言いましたように。出エジプトのときも一緒に歩いてくださいました隠れたキリストだった。だから、小池先生は、モーセを通して与えられた律法は「隠れた福音」と捉えられた。「すべし、すべからず」ではないと。

「私はお前の神である。私はお前の父である。お前は絶対に私を否定なんかできっこない。偶像なんか造れないはずだ。裏切りなんかできないはずだ。人殺しなんかできないはずだ。私がお前の神ではないか」

という、神さまの方から信じかかって、つかみかかって語られている福音なんです。それが

「すべし、すべからず」

という律法となつて頭れたから、人間は躓いた。人間の肉——どんなに信頼されても裏切つてしまう、それが肉です——弱さ、そこに苦しみがあった。それでも、キリストはその歴史を導いておられた。それが新約となつて、顕なキリストとなつて現れてくださった。だから、旧・新約一貫してキリストが貫いているという、そういう捉え方をしておられる。これも非常に先生の福音把握の、聖書把握の特色と言つていいでしょう。

今までは、旧約の神は恐ろしい神、皆殺しの神で、

「二晩で二万三千人が殺されてしまった」

とか。神の逆鱗にふれたらひとたまりもないという怒りの神であつて、ルターもその前にブルブル震えていた。キリストは優しい愛の神だというふうに、あまりにも二つが両極に分かれていたけれども、実はそうではない。審きつつ救い給う神である。しかしながら、そこに義のキリストを顕すためにあえて審判が表に出てきた。それをキリストは全部ひつかぶつて、私たちを無条件絶対の恵みで贖つてくださった。始めに、神の厳しきというこ



とを、審判の厳しきということを知らなければ、救いの有り難さがわからない。

さんざん神さまの恐ろしさにおびえてこられた人は、今や完全に絶対無条件のこつちに生き抜かないと、損ばかりしますよ。いつまでも、旧いところに迷いこんだらダメです。もう絶対無条件です。無条件、絶対なんです。条件がない。

「あなたはどのような存在でなければ審くよ」

とか、そんなことを何も仰らない。無条件、絶対です。そうでしょ。その中に常に抱かれてある。そういう福音なんです。

果たして今の日本のキリスト教界において、あるいは世界のキリスト教界において、そういうふうな福音が語られているかどうか、私は教会めぐりしていませんので、知りませんが、けれども、ここまで徹底した無条件絶対、絶対次元が相対次元に切り込んできて、闇を光に変える。しかも、あの父に抱かれ、父と一つであったキリストの同じ姿に、今度はキリストと私たちが一つにされる。それは聖霊がしてくださる。だから、

「神―キリスト―聖霊―我」

この四位、一体がもう既に成就している。本当に祈り入っているなら、その人において成就している。

「私はちつとも聖きよくなっているような気がしません」

なんて、そんな感覚なんかどうだっていい。神さまの御言みことばの絶対性、御業みわざの絶対性、それにかけていきなさい。こういう無条件絶対、宇宙的なキリストの世界、そこに我々は抱かれています。あまりにもスケールが大きすぎて、小さな器に入ってこないんですよ。

けれども、海の水の一滴しずくもやはり海の水なんですよね。そうでしょ。海水を掬すくった掌てのひらの中の水も太平洋の水も同じ水なんです。そうでしょ。我々が吸っている空気はわずかな量ですけれども、これは宇宙の空気とつながっているわけでしょ。だから、一粒の滴の中に永遠が宿るといふか、一つ一つキラキラ輝いている露に永遠が宿っているという、そういう受けとり方。先生はブレイク（William Blake 1757～1827 イギリスの詩人）の詩をよく引かれましたね、

「一粒の砂の中に宇宙を見る」

とか。そういうふうには、我々は宇宙という鴻大無辺なる存在からみれば、また時間の無限に比べれば、なんと儂ほかない、また芥子粒からしより小さい、吹けば飛ぶような存在なんです。けれども、その吹けば飛ぶような存在にキリストという無限無量が宿って、

「お前は、吹いても飛ばない。大丈夫だ」

と言う。そういうふうには、一人ひとりをとことん大事にするというところに、またこの福音の素晴らしさがある。量でいかなない。多数決でいかなない。本当に九十九人を放っておいても、この一人を絶対救い上げるといふ、そういう熱愛。それで包んでくださる。そういうった無条件絶対です。



それから、さつき「新宗教改革」（209頁）のところに戻ります。

「また「二、三人わが名に在って集まる所に我在り」という極小の中に極大が反映しているのである。」

《問題中の問題は、本当に十字架を体受しているか。本当に聖霊が内住しているか。然らば本当にキリストの無者であるか、然らばキリストに在って無限無量なるものを賜<sup>たまわ</sup>って、一切の差別相を超越し、且つ親しく包摂しているか。諸々の矛盾、逆説を十字架で受け入れ、荷<sup>にな</sup>い、大調和を大宇宙の如く胸三寸の中に蔵<sup>おぼ</sup>めているか。あらゆるものをオリエンテーレン（位置づけ）して霊的有機体的に把握しているか、劇的な宇宙と歴史を認識し、過去と未来を終末的現在においてとらえているか。黙示録が啓示している象徴的な歴史の終末と、終末の新天地の大希望、大現実を聖霊の光の中で霊視しているか。聖霊の自然の愛の中に人間的な愛を融合させて、人類の歴史の深刻な矛盾と涙と血のため、全存在を祈りとしているか。……これが新宗教改革への祈りである。》

と。前にもここを読んだときに、私は本当に感動して読みましたが、今またそういう思いが新たにです。

### ● 宗教と文化は樹木の如し

あと少し、小池先生の福音の特徴のようなものを拾いあげていきますと、さきほど、『無者キリスト』の「宗教と文化」というところで、「受肉のキリストとキリストの受肉」というのを読みました。その続きを読みましょう（361頁）。

《これは信仰をもつてするキリストの受肉と申して可<sup>よ</sup>い。しかしこれは、キリストと同じ霊、すなわち聖霊が内住しないでは言えないことである。聖霊の内住のためには、十字架の贖罪を本当に、腸<sup>はらわた</sup>の底で受け入れ、自分が本当に贖<sup>あがな</sup>われ、我執という罪から解放されている者であるという絶対恩寵<sup>おんちゆう</sup>を無条件に受けとめなければダメである。

無条件絶対ということ。それを受けとらなければダメであると。

手放しではどうにもならない我を贖いといった十字架のキリストの愛の前に絶対降伏しなければ、本当のたましいの碎けは得られない。碎けそのものはキリストの十字架であるから。神の審判の義であると同時に、キリストの贖罪の愛である十字架において我は碎けを賜わり、罪からの自由を賜わった。そこに聖霊が宿る。み霊がくると、そこにキリストの義が与えられる。それは愛への力ある自由である。まことに義・愛不離一体の消息で、これが本当の信仰の現実である。」

それから、「信・生・愛一如」という見出しのところ（362頁）、

《信ずるとは、わが生（全存在）を、我を愛する者——神・キリスト——に棄身<sup>すてみ</sup>で全托することの他何ものでもない。それが真に生くる道であり、それが真に愛を体現する



道となる、というわけである。ところで全托といってもそれはどんなことか。ちょうど乳呑児が母の胸に自分をとっぷり抱きこまれるように、祈りをもっておのれを霊的に神のふところに投げ身することである。イエスは正にそのような実存者であった。彼が「父よ！」といって祈りかかるとき、既に神のふところの中で祈っているのである。……パウロが、「我キリストの中に」とか「キリストわが中に」とかいう表現を百何十回も手紙の中でやっている事態である。これが本当の信の消息で第五図のような現実で、この三重の圏に満つるものは聖霊である。》

「第五図」というのは、「神—キリスト—我」の三重の内接円の図ですね。我の円の中には十字架が立っている。

それから、「宗教と文化は樹木の如し」という見出しのところ。これはとても大事なところですよ。なぜかと言いますと、とかく、宗教というものは宗教で別世界、我々の地上の営みは地上の営みでまた別と、全く別々バラバラというふうにいる。大体、宗教家という方々は、この地上の我々の世界を非常に——軽蔑とは言いませんけれども——棄てるとか、出家するとか、別世界へ入ってその中にとじこもる。そして、こっちは俗人だ、俗界だという。我々はどうしたら救われますか。

「俗界を棄てて、絶対界の方へ入りましょう、山へ籠りましょう」と言う。そういう、宗教と我々の世界というものを分離して、あれかこれかなんです。本当に生命が欲しい人はこっちへ入りなさい、もうこの世とは絶縁しなさいと。

ところが、先生のは違うんですね。文化と文明というのは人間の営みです。人間の営みを肯定される。肯定されるけれども——それに携わる人間は本来、人間存在そのものが絶対界とさっきの絶対界と両方に関わっている。今、絶対界を上を書いて、絶対界を下に書きました。上下からいうとそうです。でも、別の見方をしますと、あの樹木の絵で謂われていることは、上に伸びていく幹、枝は文化文明で、こっちが絶対界なんです。絶対界は根つこの世界で見えない世界です。

人間は、見える世界で、絶対界でみんな仲良く暮らしています。いろんな営みがあります。学問をやったり、経済をやったり、芸術をやったり、いろんな形で人は社会をつくって、人それぞれに天分を生かそうと思って活躍するわけです。百花繚乱という。

しかし、その百花繚乱がこの根つこをもたない百花繚乱なら、やがていがみ合っつぷし合っつぷしてしまう。自我というものが働くから。他人を妬むとか、けなすとか。正直に心から素晴らしいものを素晴らしいと、なかなか人間は言えない。本当に突き抜けた人は、素晴らしいものは素晴らしいと言う。けれども、そうでない者は、「なんじゃ、あれは」とけなすんですよ、妬むんです。そういうのが我々人間社会の常です。だから、争いがあるわけです。地球上に争いが絶えない。それが、なぜかというところ、この根つこにつながらないから。この絶対界と本当につながればいい。それは各人がつながらないといかん。「キリス



ト直結」ということです。

各人がキリスト直結——あるいはお釈迦さんでも何でもいい——その絶対界と一人ひとりの魂が直結する。人間というのはたましいの存在ですから、霊的存在です。この魂が本当に絶対界とつながると、その人自身が自由な人になる。キリストのような無限無量な人になる。その無限無量な人であつてこそ、本当の営みができるといふわけです。お医者さんなら、本当の医療ができる。先生なら、本当の教育ができる。すべて、人間存在はまず絶対界の中に深くわけ入つて、そこで自由にされて、そして地上に飛ばたいといふければ、これは素晴らしいものが榮えていく。これはちようど樹木のように、下に深く根がおりていけば、上に天高く育つていく。そして、枝を張つていく。枝を張るといふことは根つこがまた地中に伸びているということ。方向は違ふけれども、根つこがこの文化を支えている。そして、文化を否定するのではない。それを生かしていくんだという、こういう積極的な捉え方というものは、私はお目にかからなかつたんですよ。

自分が学者という仕事につこうかと思うときに、宗教というものは

「無条件に信じなさい。考えたらダメ、疑つたらダメ、ただ信じなさい」と言う。学問の方は、

「疑つてかかりなさい。とことん疑つてかかりなさい」

と言うでしょ。だつたら、どうなるの？ と。こつちは理性です。理性とか情とか、知・情・意。こういったものが働く世界なんです。

さつき「理性の奥に霊性を」とか、「情の奥に靈感を湧き立たせ」とかありましたように。こういったそれぞれの我々の知情意の働き、芸術的な働きとか、理性的な働きとか、あるいは政治経済、何であろうと、哲学であろうと、その他のいろんな人間の営み、それを担っているのは人間そのものだ。その人間そのものが本当に絶対次元と結ばれて、それを呼吸して、キリストのような自由な存在にされたら、ここが本当に花ひらくよと。キリストというお方は、我々と同じ人間でありながら、この絶対次元を生きていた。だから、ここが凄かつた。お医者さんもかなわないような医療をなさつたわけでしょ。誰も与えることのできない「永遠の生命」をお与えになつたでしょ。正に、人間イエスがあのようになつたことをなさつた。それは深く絶対界とつながつて、

「我を見し者は父を見しなり」

と。それはキリストの専売特許ではなくて、我々がキリストの受肉という事態になつたら、「聖霊をいただいたいて、それに信頼していくなら、どんなにちつぽけであるうと、その人らしく本当の花が咲くよ、絶対の質をもつた花が咲くよ。量ではない、姿かたちではない。永遠の質をもつて、絶対次元の質をもつて、無限の質をもつて輝く。地上での人生の長い短いではない。短かろうが長かろうが、それは相対的問題で、その地上の生命に本ものが宿つたら、あなたは永遠の生命者だ」



という。

あの蟬せみという存在は、地中で長いあいだ生活して、やっと地上に現れたら、もう命のかぎり「シャンシャン、シャンシャン」と鳴いてますね。そして一週間くらいでもう息絶えるんですよ。けれども、あのシャンシャン鳴いているすがたは本当に凄くと思います。我々の人生も、本当に無我夢中で、蟬のように夢中で生きる生き方は、この絶対次元とつながっているときに本当にできる。そうでなければ、

「あのことが心配だ。このことが心配だ」

といろんな思い煩いにとらわれて、蟬のように鳴けない。「シャンシャン、シュー」というような感じで（笑）、ヒグラシみたいな鳴き声で。あのアブラゼミだとか、クマゼミの鳴き方というものはもの凄いですよ。ああいう姿に我々を化してくださるのはこの聖霊というお方です。だから、

「聖霊は何ものにも変えられない」

と先生は言われるわけです。無限無量という。そういう解き放たれた、絶対無条件であり、解き放たれて、宇宙的なキリストを告白され、そして、我々はそれに与あずかって同質的な生命に生きる。一切を包摂する。こういったスケールの大きい、そして、現状から逃避しない、逃げない。さりとして、政治運動をしろとか、やれ宗教運動しろとか、何々しろとか、絶対に仰らない。

やはり、先生の福音の根底に流れているのは、イエス・キリストのあの姿なんです。イエスは聖霊を受けられたあと、荒野の試みに遭あわられています。荒野の試みで一切の誘惑を退けて、ただ神の道のみを行くという。あそこに無者キリストの姿が出ているわけです。

「石をパンに変えろ」

「ノー。神の言葉だけで生きる。生命より大事なものは神さまの言、御言、御

意、それだけだ」

「奇蹟をやってみろ」

「ノー。私はただ神さまだけを受けとっていく。神を試みることもなんかやらな

い。奇蹟の業で人を驚かしたりしない」

と。非常にそういう意味では地味ですよ。

そして、戒められたのは「四つの非ず」ということ。霊的傲慢とか、御利益信仰とか、他宗排撃のパリサイ的な姿だとか、いわゆる観念信仰的な頭ばかりだとか。そういうのではなくて、本当に自分を棄てていくけれども、それはキリストの歩まれたその道を行くという。その意味で、キリストと同じ生き方をしていく。しかし、一人ひとりがそういう行き方をしてこそ本当のものが築かれるというのが、小池先生の告白なんです。

私もそうなんです。人はみな結社をつくり、団体をつくり、大きな組織をつくって、世の中を動かそうとします。選挙だつてそうでしょ。この世はそういうように動いています。



けれども、一人ひとりが本ものにならなくて、何をやったって、それは砂上の楼閣だ。やがて崩れてしまう。ローマの大帝国も崩れていったわけです。すべてこの世の覇権を誇つたものは全部消え去っていきました。消えないものは本当にこのキリストの霊の生命をいだいて、個として100%生き抜いた人、キリストの姿になって生き抜いた人、それは永遠の質をもって輝く。天界に輝きます。そうでない生き方をした人は一時的に栄えているようでも、あだ花ですよ。やがて滅びていきます。あなたはどちらをとるか。

### ●キリスト直結

『無者キリスト』の「人間の福音的実存七相」というところに、「破れ」「砕け」「突破・突入」「内住・常燃」——聖霊です——、「担い・抱き」——愛です——、「棄身・棄石」そして最後は「本願・栄光」とある。そういうのが我々キリスト者の生き方だと。それはキリストの歩まれた道をひたすら歩んでいくという姿だという。それを無者の角度からとらえたのが「第三部 無の実存」というところです。この『無者キリスト』はこの『無の神学』の内容をああいいう姿で渾然一体として表してくれている。ですから、先生もこの『無の神学』の中で、

「どうぞ、『無者キリスト』をもう一度読んでほしい。これは姉妹篇ですから」

とされています。この『無者キリスト』を本当に、皆さん、くりかえし読んで、これを血肉とされたら、それはもう変貌せざるを得ないですよ。本気で読んでください。読みながら、その世界に入っていくんです。本当にそういうふう読んでいただきたい。もう、「小池辰雄」なんてどこかへ消えたらいい。「小池辰雄」ではない。聖霊が書いておられる。聖霊の呻きの書だと思って読む。先生も無者になりたいわけですよ。「小池辰雄」が消えてほしいんですね。

「小池の奥にあるキリストを見よ」

と仰ったではないですか。だから、小池辰雄というのは消えてしまつて、本当にそこに聖霊のキリストのみ姿が現れてくるような、そういう祈りをもってこれに読み入ってください。ならば、本当に凄いなと思います。私は、

「無条件絶対にキリストを受けとる」

と仰いました。ところが、受けとりつばなしではない。受けとつたら必ず動きだす。愛を受けた人は使命をもっている。存在は動きだす、働きかけるんです。それは祈りによって道が示される。だから、我々は福音を受けて、聖霊を受けたら、必ず動きださざるを得ない。使徒行伝でもそうですね。聖霊を受けたら動きだしました。キリストが乗り移つて——パウロがそうですね、ペテロがそうですね——我々もやはり、質的にはそういう存在にされていく。使命的存在です。もはや自分の幸福なんか、そんなものはどうだっていい。そういうことです。



それから最後に、私の『無者キリスト』（2001年10月河出書房新社版）の「復刊あとがき」をもう一度お読みしたいと思います。前半は、小池先生とはこういうお方だということがずつと書かれています。404頁、

《>つした著者の信仰と思想の特色として、次の三つを挙げたいと思う。

第一は、著者の告白するキリストないしキリスト教は、西欧世界において変容を遂げたキリスト教ではなく、福音書において自在なすがたで顕現している霊的人格としてのキリストを、日本人の心をもって歪みなく受容することによって著者の心魂の中に形成されたキリストである。著者にとつてキリストとは、太陽の光のごとく、無色にして無限色の光を放ち、万人を救い上げ、永遠の生命を与えてやまない霊的人格である。著者の信ずるキリストは民族的な制約、限界を突き破り、一切を包摂し、一切を活かす愛そのものなるキリストである。

各民族には、それぞれ固有の宗教的伝統があり、独自の精神世界を形づくっている。それを西欧的キリスト教によって排除ないし否定するのではなく、それぞれの良さを活かしつつ、愛の光の中に包み込み、生命づけていく、そんな広さと深さをもったキリストの福音こそが真に世界に平和をもたらすものである、と著者は語りかけている。

西欧において形づくられたキリスト教になじみがない日本人にとつて、著者の告白するキリストは、そうした西欧的キリスト教の枠から解き放たれた無限定、無量なるキリストである。著者は、キリスト教といわずして、「キリスト道」という。日本人は古来、道の民であり、実生活の中で真理を身につけることを学んできた民だからである。

長年、ドイツ文学、ドイツ宗教史を専攻し、おのずと西欧の文学、思想、宗教に造詣ぞうげいの深かった著者は、他方で、仏教及び、中国・日本の古典に親しんできた。こうして著者の中で、東西が融合した。

著者の語るキリスト及びキリスト道は、ユニークでかつ、世界に通用する普遍性を帯びるものとなっている。本書第三部の第一章「無者Ⅱ無的実存者」や第二章「天鐘」、第五章「宗教と文化」をお読みいただくならば、そのことに気付かれることであろう。》

「キリスト教」と言わない。「キリスト」と仰る。無者キリスト、キリスト直結。キリスト教ではありません。教えではありません。キリストそのものをいただいたいて、キリストと同じ姿に化せられて生きていくんですと。一人ひとりにおいて花咲かせてくださる。条件は何もありません。絶対無条件です。十字架が片づけてくださったから、その前に平伏す。これしかない。平伏さざるを得ないではありませんかと仰る。「平伏せ」という命令ではない。自分自身が極限的な姿で、極限状況でどうにもならないという破れ、破れの死の姿であるときに、光を求めたときに、十字架の光がさしてきたら、その前に平伏すほかにないではないですか。そこで

「お前は解き放たれた。お前は自由だ」



と仰ってくださいれば、

「はいっ。ありがとうございます」

と言つてしがみつく。そうしたら、もうその時、聖霊が宿っている。

深い祈りの中で自覚的に聖霊を感じることはありますよ。しかし、その時に聖霊が来たのではなくて、その前から来ています。十字架のありがたさを涙をもって受けとる人には聖霊が宿っている。それが、ある時に、非常に爆発的に、「聖霊のバプテスマ」というような現象となって現れることがありますけれども、それが聖霊のバプテスマではない。十字架を本当に受けとった人には、聖霊は宿らざるを得ない。これは切り離せない。一如一体なんです。

人間の生命は精子と卵子が受精して始めてできる。十字架と聖霊はそういう受精卵みたいなものです。それが我々の中に宿ってくださいですね。我々の外で起こっている事象がうちに宿る。なにか体外受精みたいものだ（笑）。申し訳ない譬えですけども、そういうふうにして、本当に一如なるものが我々の中に恵みとなって与えられる。そのキリストが道となってくださいました。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と言つてくださいました。そういうふうにして、キリストが我々の中に突破突入して、

「お前は大丈夫だ。さあ、生きろ」

と言つて励ましてくださる。そういうキリスト。だから、

「教会へ行かねばなりませんか。どの教会に属すればいいんですか。洗礼を受けなければいけませんか。献金はいくらするんですか。月に何回くらい集会に出ない

といけませんか」

とか、そういうことは一切ないということです。

「キリスト直結で行け」

ということ。かえって、それで不安に感ずる人はあるかも知れません。どこかの教会に属して安心しておりたい。そういう人には、私はカトリック教会を薦めます。受け入れてくれますから。ミサというものに与かつて、パンみたいなものを口に入れてもらって、ありがたうございますと言つていけば、それでいいんですからね。こんなことを言ったら、カトリックの方に怒られてしまうけれども。何かそういうところに身を置いていることによつて安心を得られる人はそこにいらつしやい。悪いところではありません。あなたに代わつてたくさんの人が祈ってくれているから、あなたは祈らなくなつて、祈りの専門家がおるんだから大丈夫ですよ。カトリックというのは本当に、そういう意味では、迷いやしい人間を抱くこつを心得ています。何も心配せんでいい。私も

「何も心配せんでいい」

と言っているんですけども、何だか、個人が絶えずキリスト直結というふうには、自分で



努力しないといかん。ああいう組織に入ったら、入っているだけで安心なんです。教会へ行って坐ってれば、もうそれでいい。洗礼を受ければそれでいいんだと。そういう意味ではカトリック教会は、私は悪いとは思いません。そこで本当に安心が得られる人はそこからへいらつしやればいい。

でもまた、私のように、本当にキリスト直結、それでないとやり切れんというやつもいる。どうぞ、カトリックの人は私を無視なさらないでくださいねと。昔は、

「カトリック教会の外に救いはない」

と言われていた。カトリックの中に属することが救いだつた。

「教会の外に救いなし」

だつた。それで、内村鑑三は放り出されたわけですよ。

「いや、外にも救いがあった」

と言って、内村鑑三は喜んだわけですよ。そういう、人がつくるいろんな団体はあつていい。しかし、それが本質的なものではないということ。先生は言っておられるわけです。それで、

「キリスト直結だ」

と。そのキリストは無限無量者。無者として捉えた。いわゆるヨーロッパ的なキリスト教ではない。そういうところが一つの特色です。これが東西を一つにする、世界を一つにする。そういう意味で私は受けとつたわけです。

### ●健全な福音

それから、第二の特色。

《第二の特色は、知的なものと霊的なもの、知性と霊性の双方が著者において全き調和を保っていることである。》

従来、ややもすれば、理性と霊性、知的次元と霊的次元とは、

今日は絶対次元と相対次元というかたちでお話しましたけれども、知的な次元と霊的な次元は、

相容れないものとして、相互に排除し合ってきたように思われる。キリスト教界においても、知的・学的探究に傾斜するか、

「研究、研究」と言っていてやるか、あるいは、

超越的世界を希求して霊的諸現象を追い求めるかのいずれかに属する傾向にあつた。

祈り込んで、ウワーツと神秘の世界に入って、霊的現象が出てきて、「ああうれしい、うれしい」という、そういう霊的な現象を追いかけるか、あるいは知的な探究に走るかであつて、本当の道を行くものは、というか、両者を融合するものは今まで乏しかったように思います。

著者は、深い祈りと宗教体験を通して聖書及び神の絶対次元に深く分け入りつつ、



それでいて、決して宗教的「諸現象」にふり回されるようなところがない。思索と信仰とが全き調和を保ち、まさに「健全な福音」という安心感を与えてくれる。》

そうでしょ、多くの人が宗教は嫌いだというのは、「オウム真理教」みたいにウワツと行ったり、「統一協会」みたいにあんなことになったりとか、いろんなそういう行き過ぎ、逸脱があつて、あれが宗教だと思うから、「ノー」と言います。でも、先生の説かれた福音というのは実に健全なんです。霊力的宗教ではない。現象を問題にするな、根源現実の中に自分を置きなさいと。そこからおのずと発してくるもの、それを受け入れなさい。しかし、現象ではない。根源なるものをしつかりつかんで、そこに留まりなさいということをおられる。これは大事なことです。そして、常に霊的無者であれと言う。己を誇るな、己の業を誇るな、常に砕かれていろ、無者に徹して行けと。自分を低くして行く道です。そういうところが非常に大事です。

それから、第三。

《第三の特色は、「聖」と「俗」の共存である。》

聖なる世界、それから俗なる世界。聖人と俗人ですね。

少数の聖職者だけが救いにあずかるのではない。「聖」なる方が「俗」なる世界に降りて来て、俗なる人間を、あるがまま、そのままに救い上げる。闇を光に化する、死者者に生命を与える、日常性の中にこそ聖なるものが宿る。日常生活の中で我々は、神の絶対次元に触れ、救いにあずかり、生命づけられて生きてゆく。神・キリストは、ご自分の無限無量の愛をもって、一切を荷い、一切を包み、一切を生かすめ給う。その愛に貫かれて我々俗人も、同質の愛をもって隣人に接し、隣人を助ける存在とされたい。

《このような生き方を著者は体現していた。》

そういうふうにとめました。この三つの特色はとても大事なことだと、昨日読み返して、思いました。もうすっかり忘れておりましたけれども。

一応、以上のようなことで、著者の作品の中から告白したということでおゆるしいたできたと思います。一言で、「小池福音はこれである」とは、とても言えるものではないですけれども、今日ずっと拾ってきたところに非常に小池先生の福音の特色が表れていたと思いますので、また、それを参考にして、皆さんご自身でそれぞれ自分でつかまえていただきたいと思います。

（『無の神学』を読む」の講話は2002年1月から2004年7月まで16回にわたって開催された。本講話はその最終回のもの）

